

<レジュメ作成にあたって>
「引用」スピノザ原文は斜体
・適宜コメント

第二章 準備の問題

1 スピノザの二つの技術

デッサンの技術
レンズ磨き

スピノザの哲学
「フェルメールの光の絵画に近い」(82)
レンズを通して光そのものを画布に定着させようとしたフェルメールの絵画
「光の哲学」実現のための理論的困難

・エピソードからのほのめかし

2 『知性改造論』と方法

前章 スピノザの哲学 総合的方法の実現→論述を開始するにあたっての準備の問題

本章 『知性改造論』『短論文』からの検討

失敗から始まる哲学書

「人間はしばしば意思を強く持つことで自らの感情を抑え付け、生き方を変えようとする。しかしそれはスピノザ自身が経験したように結局は失敗する。感情に働きかけるのは感情だけだからだ。」(87)

スピノザの気づき

認識もまた感情を生み出しうる。
「認識には、感情に引きずられている状態にある人間をその受動性から脱出させる力がある。」(87) →スピノザの実体験から『エチカ』の基本的な思想

準備の問題

方法の探究における無限遊行の問題

スピノザの方法論の核心に見出される単純かつ解決困難な問題(89)

方法の3つの形象(1)—道具

方法の3つの形象(2)—標識

公共的ではあり得ない真理

認識の外側に真理の基準を設けることはできない
→認識するのとは別に、認識した後で

「認識が真であることは、認識することそのものの内部で、認識することと同時に確かめられなければならない」(93)

「真の観念の保証とは真の観念を持つことそのもの」(93)
「真理とは、自分でそれを獲得した時に、真理自身によってそれが真理であることを告げられる」
(94)

方法の3つの形象(3)―道

「観念が適切な順序で獲得されていくための道こそが方法である」(96)
「然るべき出発点から、然るべき順序で観念が導き出されていくなれば、観念を獲得していく行為
それ自体が観念の獲得を指導し、制御していく」(97)

行為自体が、その観念が真であることを教えてくれる
真であることの保証は観念の獲得という行為そのものに内在
観念が導かれていく「道」そのものが方法
道はただ観念を導き出す行為と一体のものとしてのみ存在

スピノザの方法 経験の連鎖(98)

観念の真理性に次々出会うという意味で受動的
自らが観念を次々に導き出していくという意味で能動的」
真なる観念の獲得+どうすると真なる観念に出会うことができるのか、真理性へと向かうために自
分は何ができるのかをも認識(98)

「方法は何かについての認識を与えると同時に、認識そのものについての認識、『反省的認識』を
与える」(99)

「方法とは、方法的認識あるいは観念の観念以外の何ものでもない」(第38節)

「物事を理解することが、結果として自己の能力の認識をもたらす」(99)

- ・ダイナミックな(運動的な)方法、循環、弁証法的過程
- ・内にある真理

出発点の問題

然るべき順序とはいかなるものか
然るべき順序は一体どこから始まるべきか

できるだけ早く完全者の認識に到達することに専念(101)

定義を高く位置付ける哲学

目標 総合的方法の原理へと向かうための出発点を得ること

発生的定義

円の定義「一方の端が固定され他方の端が運動する線分によって描かれた図形」
定義される対象の発生を描く定義
定義される対象の原因を含みこむことで、その対象の発生そのものを描き出す定義